

特集「産まないかもしれない」／村上ファンド「復活」と美女

AERA

'09.12.7

No.58定価380円

アエラ

毎月10日発行（11月30日発売） 価格1200円



作家 吉田修一

簡単な挨拶だったが、ちょっとだけ噛んだ。「今日は雨の中、こんなに多くの人々に集まっていたら、感激しています」

11月中旬、横浜市の六角橋商店街。細長い路地にある集会所の2階に、50人近い地元住民が集まった。壁に貼られたスクリーン。柱を避けて並べられたパイプイス。手作りのミニシアターだ。

上映前に挨拶をしたのは、慶應大学経済学部4年の中村俊喜



作品に感動して運営を手伝う大学生たち。中央が中村俊喜君。左から家谷直嗣君、塚田夏希さん、西野圭亮君、前田理芳子さん

君。この日の無料上映会は、中村君が商店街に飛び込みで電話をかけて実現した。呼び込みをし、イスを並べたのは、中村君の仲間の大学生たちだ。

部屋が暗くなる。「画面が斜めになってるよ」

スタッフから声がかかった。中村君自身が、映写機の角度を調整して、上映が始まった。

テレビドキュメンタリー「泣きながら生きて」が放映されたのは、2006年11月3日だった。上海に残した家族のために

東京で懸命に働き続ける一人の中国人男性、丁尚彪さんを追った。視聴率は15%を記録した。

当時、中村君は大学1年。帰宅して何げなくテレビをつける

と、番組が始まった。コピーを淹れ、携帯でメールを打ちながら、横目で眺めた。いつの間にか引きこまれていた。

《隣の国、中国。1966年から、およそ10年間に亘って展開された、文化大革命。若者たちは、思うように勉強することのできない時代を過ごした。あ

一本のドキュメンタリーが「草食系」動かした

「泣きながら生きて」の奇跡

3年前に放映された一本のドキュメンタリー番組が、封印を解かれて映画館で公開された。

きっかけは、就活中の一人の大学生の熱意だった。

作品中に込められたバトンが、「草食系」に手渡された。

編集部 伊東武彦 写真 篠塚ようこ

父の人生「つまらない」

↓

の時の一人の若者が、日本へやってきた。1989年6月。上海に、妻と一人娘を残したまま

中村君は岐阜県出身。中学時代から、社会に役立つ仕事をしたいと、医学部を志望していた。しかし叶わず、経済学部に進学した。卒業生の多くは、金融関係に就職していた。その道を疑うことなく進んでいく先輩の気持ちだが、わからなかった。でも、だからといって自分に何ができるのか。作品には感動したが、自分への苛立ちも、残った。

2年後、就職活動の最中だった。米国に住む友人が、感動的なドキュメンタリーがあると、ミクシイに書き込んでいた。題名は書かれていなかったが、「あの作品だな」とピンときた。

動画投稿サイトを検索した。粗い画像を、今度は食い入るように観た。ずっと持ち続けていた「なぜ働くのか」という問いへのヒントがある気がした。月9万円の仕送りをしてくれる両親を、改めて思った。

父親は、東京でエンジニアとして働いていたが、中村君が生まれると、故郷の高山に帰って



13年ぶりの夫婦再会。妻のつかの間の滞在で、笑顔と涙が、交錯した

に届いていたのか。自分の中で終わっていたはずの作品が、息を吹き返した。

それでも、横山さんは、「絶対儲かりっこないよ」と彼らに言った。

筋書きのない10年追う

横山さんは銀行などを経て32歳でフジテレビに入った。社会部記者を経てドキュメンタリー畑に進んだ。取材対象を見つけると、企画意図だけを上司に説明して、現場に飛ぶ。そこで何が起きるかは、わからない。じつと対象を見つめ続けた。

この「泣きながら生きて」をめぐる物語も、何が起きるかわからないドキュメンタリーそのものだった。1995年の年の瀬だった。「カメラを貸してほしい」と、一人の中国人女性が訪ね



汐巻裕子さん

映画プロデューサー

この作品に出会ったことをきっかけに会社を辞め、フリーになった。公開までのビジネスモデルを作り、配給・宣伝を担当した

「泣きながら生きて」

文化大革命下で学業の機会を奪われた35歳の丁尚彪さんは、1989年、日本で働きながら学んで就職し、妻と娘を呼び寄せようと、借金をして来日する。しかし日本語学校があったのは、北海道の奥地。職はない。借金を返すために東京で働き続けるうちに、丁さんの夢は、稼ぎをすべて仕送りして娘に一流の教育を受けさせることになっていった。東京で黙々と働く父、上海で娘を育てる母、米国の名門大学に入学した娘。運命に翻弄される家族を追った。東京・新宿バルト9ほか、全国で順次公開中



てきた。その6年前に来日して東京学芸大で学び、卒業後は商社で働いていた張麗玲さん(42)だった。日本で懸命に生きている留学生の姿を、中国本土の人々に伝えたいと訴えた。カメラを貸すことはできなかったが、横山さんは撮影スタッフを紹介し、アドバイスをした。張さんの取材対象の一人が、留学生新聞を通して出会った丁

さんだった。横山さんがサポートして、上海、ニューヨークでも取材をした。張さんと横山さんは、誰にも筋が書けない10年を追いかけた。

笑顔と涙の再会と別れ

10年間に、父娘、夫婦は一度ずつ再会する。娘の琳さんは、米国の大学に向かう途中で、東京で父と会う。

〈小学校の時から、会っていないお父さん。東京で、8年ぶりに再会します。24時間限定のトランジットです。〉

丁さんが、琳さんを見送るところができるのは、成田空港の1駅手前、成田駅まで。身分証明書の提示が求められる、成田空港まで行くことは、できないのです。

5年後には、夫婦が13年ぶりに再会する。

〈13年間の思いを重ねながら2

人の東京です。

3日間のトランジット、最終日。黙ったまま。一緒にいられるのは成田駅まで。

笑顔と涙が交錯する、再会と別れ。再び丁さんは東京で一人になる。三つの国に離れた家族はいつか一緒に暮らせるのか。娘の夢はどうなるのか。

ドキュメンタリーの奇跡ともいうべき結末が待っていた。ニューヨークで勉強を続ける琳さんは、両親の思いを背負って、新しい生命を生み出す仕事に就く。

〈両親から受け取った、重い重たい、リレーのバトン。そのバトンの意味を、琳さんは知っていました〉

ドキュメンタリーのカ

横山さんは言う。

「家族のために頑張るのは、ある意味で当たり前のこと。この物語は奇跡のような結末で、単なる家族の絆という言葉ではなく、くれない力を持つたと思う」その力が一人の大学生の胸を打ち、汐巻さんがつなぎ、20代の妹尾さんがその思いを受け取った。横山さんも最後に首を縦に振った。

妹尾さんは赤字覚悟で配給を請け負い、汐巻さんは会社を辞



85歳のおじいさんもいた六角橋商店街での上映会。6月の中村君の母校を皮切りに、就活のセミナーなどでも上映された

めて宣伝に奔走した。作品を観た大学生が、ボランティアに集まった。これもドキュメンタリーの持つ力だったのだろうか。

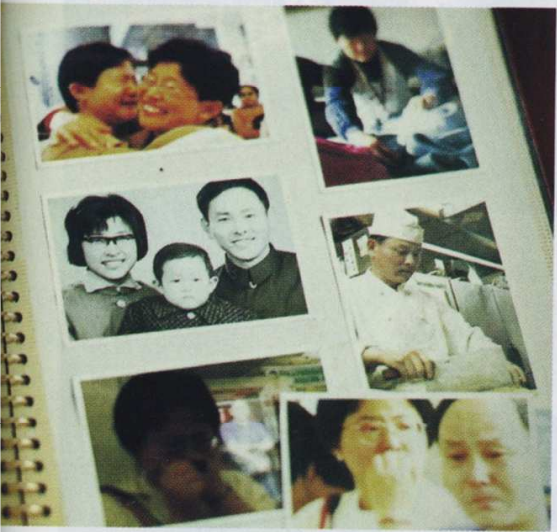
中村君は、六角橋の上映会に大学を中退したばかりの高校の友人を呼んでいた。

「僕らは草食系と言われていますが、確かに悩むと立ち止まってしまう。それが許される時代なのかもしれませんが、丁さんの姿を観て根性出そうぜ、という思いもあります」

就活中、人を感動させる仕事があったと思った中村君は、4月から都内の広告会社で働くことが決まっている。



北海道の日本語学校を「脱出」して、東京での生活を続けた丁さん



上海、東京、ニューヨークと離れて暮らす3人の10年を、カメラは丹念に追った



張麗玲さん

株式会社「大富」代表取締役社長

不眠不休でドキュメンタリーを撮った10年前に出始めた喘息が今も抜けない。日本在住の中国人向けのCSのコンテンツを制作・配給する

「暮れなずむ情景の滲むこの日本で、今、泣きながら生きていく総ての人へ、贈ります——その贈り物が、こんな若い人

教師になった。厳しい存在だったが、一方で父を見ていてつまらない人生だとも感じていた。登山部の顧問で生徒と山に登るのが習慣だが、普段は酒を飲んで、夜8時には寝てしまう。毎日、毎年、同じことの繰り返し。何が楽しいんだろうと、思っていた。

観たい作品を知らない

周囲を見回すと、世界的な金融危機以降、急速に冷え込む就活市場で、壁に当たっている仲間たちがいた。そんな彼らに、この作品を見せたいと思った。でも、一人の学生の身で、何ができるのだろうか。その頃、映画業界への就職を考え始めていた。ゼミの担当教授が、映画界で働く大学の先輩を紹介してくれた。映画配給会社に勤める汐巻裕子さん(42)だ。

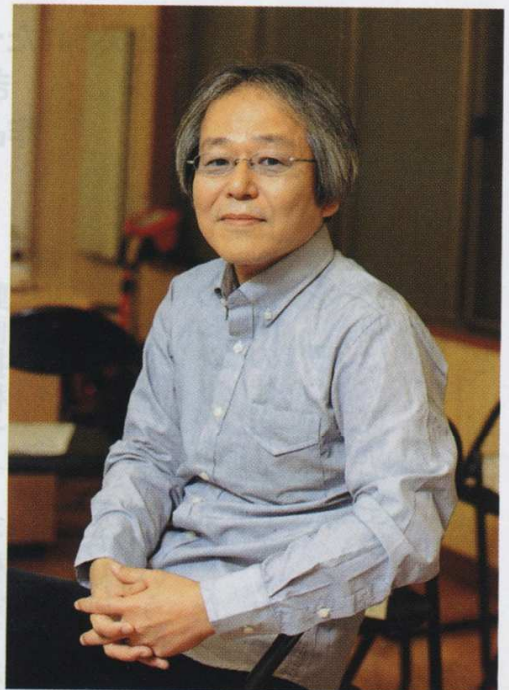
汐巻さんは、中村君に映画業界の仕組みを説明した。逆に、「いま、どんな作品に興味あるの?」とも聞いた。若い年代がどんな映画だったら観るのかを知りたかったからだ。答えは、意外なドキュメンタリーだった。存在そのものを知らなかった。動画投稿サイトの不鮮明な映像からでも、感動が伝わってきた。同時に痛感したのは、映画の買い付けの原点だった。「本当に人々が観たい作品を、実は私たちは知らないのではないか、と。若い世代が、こんな地味な作品に感動していた。驚きでした」

切実に観たい人がいるのなら、これを興行にしたっていいんだと、発想を切り替えた。映画館向けにデジタルコンテンツを探している配給会社の知り合いがいた。妹尾浩充さん(29)だ。その企画書を受け取ったのが「泣きながら生きて」の担当プロデューサー横山隆晴さん(56)だった。「個人的にDVDがほしいという人はたくさんいた。でも、多くの人に見せたいからと言ってきた人は、初めてでした」放映直後から、再放送やDVD化を望む声が殺到していた。

横山隆晴さん

フジテレビプロデューサー

現在、能登半島の高校生のドキュメンタリーを撮影している。追いかけて始めると、能登半島地震が起きて、地域の復興への物語になった



若い世代への贈り物

妹尾さんが、中村君の思いをまとめた。「ドキュメンタリーは1回限りの放映のために作るもの」と考える横山さんには、DVDにする気持ちはなかった。訥々と思いを訴える中村君の話に耳を傾けた。たまたま、中村君の母校は、横山さんが手がけたドキュメンタリー「白線流し」の舞台だった。横山さんは「泣きながら生きて」に、日本人に向けた、あるメッセージをまぶしていた。丁さんが日本で生きた日々は、日本にとって失われた10年だった。バブル崩壊後、人々は精気を失った。そのかわらで、懸命に生きた中国人がいた。横山さんは、こんなナレーションをつけていた。